

敬意と節度を失った政治



西田進一郎

いまや分断の印象だけが強い米国。15年前のある動画を見るのと、同じ国かと疑う。

2008年の大統領選は、共和

党のマケイン上院議員（当時）と民主党のオバマ上院議員（同）が争った。動画はマケイン氏が開いた対話型集会だ。オバマ氏が大統領になることを「恐れている」と発言する支持者を、マケイン氏は「オバマ氏は良識があり、大統領になっても恐れを抱く必要はありません」と論じた。別の支持者が「オバマは信用できない。彼はアラブ人だと聞いた」と話す。支持者のマイクを取り上げた。「違います。彼は家族を愛するまっとうな米国民です。たまたま私と基本的な事柄で意見が異なるだけです」

政治信条や基本理念の違いで対立することはあっても、相手の立場に理解を示し、最低限の節度を守って戦う。これが米国の政治家のイメージだった。大統領選も、敗北した候補が勝利した候補に電話し、負けを認めたとところで「決着」になるのだった。

それを完全に崩したのは、共和党のトランプ前大

統領だ。16年大統領選では、党予備選で他の候補を口汚くののしつた。本選に向けた選挙集会では、対立候補のクリントン氏が國務長官時代の公務用電子メールを削除していた件をたびたび口にし、支持者が「ロック・ハー・アップ（彼女を監獄に入れろ）！」の大合唱で応えるのが定番だった。

再選を目指した20年の大統領選では、バイデン氏に敗れたことを認めず、その結果を覆そうと手を尽くした。それらが21年1月の議事堂襲撃につながったとして、起訴された。

8月3日の出廷日、連邦地裁周辺は鉄柵で覆われ、警戒態勢が敷かれた。トランプ氏を支持する人たちと批判する人たちはそれぞれ旗やパネルを掲げてアピールした。私が身構えていた裏口では、「ロック・ヒム・アップ！」のかけ声が何度もあがった。

世論調査によると、民主、共和両党の支持者が相手方の政党支持者を否定的に見る傾向が16年以降強まっているという。過激な言説の政治家が台頭したことが要因の一つになっているのだろう。

24年大統領選に向けた指名争いの前哨戦が始まる。敵意むき出しの発言や不適切な発言を支持者がした時、たしなめる候補はどれほどいるだろうか。